様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ８ 月　 ７ 日現在

機関番号：１１１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３７０３０７

研究課題名（和文）十九世紀米国社会の世俗化との関連からみる、奴隷物語の小説化過程の歴史的研究

研究課題名（英文）The Development of Slave Narrative into a Novelistic Genre in the Context of the Secularization of Nineteenth-Century American Society

研究代表者
堀　智弘（Hori, Tomohiro）

弘前大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号：１０６３４７１９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、特にFrederick Douglassを中心とする数々の奴隷物語が、神の視点を中心とする宗教的な回心物語形式から、より世俗的な奴隷体験談へと移行していった過程を検証した。アメリカで関連する資料を収集し、Douglassについて関連する口頭発表を二つ行い、二本の研究論文（うち一本は査読有）を発表した。研究を通して、世俗化という事象と運や確率論、リスクについての言説の誕生と発展が密接に関連していることがわかり、今後の新たな研究テーマが見出された。

研究成果の概要（英文）：This study examined the process through which a number of slave narratives such as Frederick Douglass's transformed from a religious genre whose pivotal point of view was God's to a more secular kind of literary genre. While gathering relevant materials at research libraries in the U.S., I gave two oral presentations on this topic and published two articles in academic journals (of which one is a refereed article). Through this study, I found out that the secularization of mid-nineteenth-century American society and its literary texts was closely related with the emergence and development of the discourse of luck, probability, and risk, which should be my next research theme.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：Frederick Douglass　slave narrative　conversion narrative　世俗化

１．研究開始当初の背景
特に十九世紀アメリカにおいて、奴隷が自らの経験を語った奴隷物語（slave narrative）は近年、再評価の動きが顕著である。本研究は、奴隷物語から小説へのアフリカ系アメリカ人文学の発展史は、アメリカ社会が植民地時代の神権国家から民主的資本主義的な国家へと急速な変化を遂げつつあったという時代背景と呼応して、奴隷物語が宗教的な回心物語という伝統的な枠組みを脱して、より世俗的で小説的な物語形式に移行していった過程であったという仮説に基づき、いまだ体系的な研究が十分に行われていないこの歴史的過程について、90 年代以降にもたらされた多くの学問的成果を反映させて、世俗化と小説化という観点から包括的で詳細な記述と分析を行うことを中心的な課題とした。

２．研究の目的
本研究は、アメリカ社会が神権政治的な社会体制を脱して民主主義国家として大きく変貌していった時代において、アフリカ系アメリカ人の奴隷制経験を描いた物語が、宗教的な回心物語から小説というより世俗的な物語形式へと発展していった過程を詳細に分析することを通して、特に以下の二点を明らかにすることを目的としていた。
⑴　小説という近代的物語形式の成立と発展は社会の世俗化とどのように関連しているのかという問題をアフリカ系アメリカ人の物語伝統の点から解明する。
⑵　神への信仰と実業への献身を結びつけるアメリカ的な「資本主義の精神」が成立していった過程をアフリカ系アメリカ人の経験に照らし合わせて明らかにする。

３．研究の方法
本研究は主に次の二つを行う計画であった。
⑴　主に建国期から南北戦争期までの幅広い第一次文献（奴隷物語および関連する歴史的文献）を収集し、それらを読解、分析する。
⑵　アメリカ社会の世俗化の過程やそれが物語形式に与えた影響に関する研究を読み、奴隷物語の物語形式の変化を詳細に描き出す。

４．研究成果
⑴　奴隷物語形式の変容について本研究が立てた仮説、すなわち、奴隷物語の変容は植民地時代の神権国家体制から民主的資本主義的な国家体制へのアメリカ社会の急速な変化と密接に関連しており、もともとは宗教的な回心物語という伝統的な枠組みによって強く規定されていたものが、より世俗的で小説的な物語形式に移行していった過程であるという仮説は、奴隷物語など同時代の第一次資料の詳細な分析を通して、おおむね正しいことが確認された。
⑵　本研究の目的のひとつ目、すなわち、「小説という近代的物語形式の成立と発展は社会の世俗化とどのように関連しているのかという問題をアフリカ系アメリカ人の物語伝統の点から解明する」については、特に、物語を統合する視点が超越的な神を中心としたものから、個人の経験に根ざした内在的な視点へと変化したという点から分析と考察を行う必要があることが明らかになった。この「超越から内在へ」の変化は、より具体的には、代表的な奴隷物語である *Narrative of the Life of Frederick Douglass* (1845) においては、西欧社会に由来する自由という外在的な概念を、いかに奴隷としての自己に内在する経験として描き出すのかという物語制作上の問題としてあらわれる。この問題を考察するために、特に次の二点に着目して研究を行った。

①　超越と内在を媒介する言説としての崇高の美学
ダグラスは、もともとは文字の読み書きさえ知らない元奴隷の物語であったにもかかわらず、かつての奴隷としての自己が「奴隷調教師」の Edward Covey のもとに送られ、完全に服従されてしまうという事態を物語る際に、崇高の美学を想起させる描写を行っている。チェサピーク湾を航行する船を擬人化して顕著に演劇的、文学的な呼びかけに興じるこの場面は、その異質さにもかかわらず、ダグラスの『生涯の物語』に始まり、第二自伝 *My Bondage and My Freedom* (1855)、そしてそれ以降の自伝においてもほとんど修正をなされることなく収録されてきた。自由を自己の経験として描き出そうとしていたダグラスが、この場面において直面していたのは、自由の表象可能性という問題である。この点において、ダグラスの記述は、自由の倫理から自由の表象可能性という美学的問題へと至ったイマヌエル・カントの思考の道筋（『実践理性批判』から『判断力批判』への道筋）に交差する。カントの場合と同じように、ダグラスにおいても、自由の倫理から自由の美学への移行は超越（神から与えられる自由の概念）を内在化させるという動きのなかで要請され、そこで浮上する美学的問題への解答として崇高の美学が動員されるに至ったことが明らかになった。この研究成果は下記の雑誌論文②として発表された。

②　宗教的な啓示と再生の場面の世俗的な書き換え
十九世紀半ばあたりまでのいくつもの奴隷物語とダグラスの物語を比較検証した結果、ダグラスが自己の生涯における「転換点」と位置付ける Covey との戦いについての描写は、その顕著に世俗的な特徴にもかかわらず、ダグラス以前の多くの奴隷物

語において伝統的に描かれてきたような啓示の場面との連続性が明らかになった。Covey に屈服させられたダグラスのなかに反撃する意思が湧き上がるという描写は、信仰的な危機に陥った奴隷に神の声や姿が顕現するという宗教的な回心物語の慣習を踏襲しつつも、回心物語とは違い、その意思の源泉を超越的な神にはっきりと帰することを拒否することで、この宗教的物語を特徴付ける場面を世俗的なものへと書き換えている。さらに、ダグラスが Covey への勝利がもたらした意識の変革を「復活」という観点で物語っていることからも、回心物語からの影響を読み取ることができるが、この生まれ変わりの経験の根拠となるのは、宗教的物語におけるように信仰の深化ではなく、個人の満足感である。このように、先行する奴隷物語との比較検証を通して、ダグラスの物語の革新性を、旧来の物語形式に対しての創造的で世俗的な書き換えに位置付けられることが明確になった。この研究成果は、学会発表されたのち（学会発表②）、論文としてまとめられた（雑誌論文①）。

⑶　本研究の目的のふたつ目、すなわち、「神への信仰と実業への献身を結びつけるアメリカ的な「資本主義の精神」が成立していった過程をアフリカ系アメリカ人の経験に照らし合わせて明らかにする」ために、主に以下の三つの作業を行った。

① Benjamin Franklin をひとつの大きな契機とするアメリカ的な労働倫理の成立を考察するために、この理論の古典である Max Weber の『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（1905 年）を読み直し、近年の研究成果（例えば、Fredric Jameson, “The Vanishing Mediator; or, Max Weber as a Storyteller” など）に照らし合わせて再検証を行った。

② 「プロテスタンティズムの倫理」が十九世紀のアメリカ文学に浸透し、発展する上で特に重要なテクストとして、特に John Bunyan の *The Pilgrim’s Progress*（1678-1684）に着目し、それが奴隷物語や主流のアメリカ文学作品（Nathaniel Hawthorne, “The Celestial Rail-Road”（1843）や L. M. Alcott, *Little Women*（1868-1869）など）に与えた影響を検証した。

③ アフリカ系アメリカ人文学がより世俗的な物語形式へと発展していく過程を考察するためのテクストとして、特に Booker T. Washington の自伝 *Up from Slavery*（1901）と W. E. B. DuBois, *The Souls of Black Folk*（1903）に着目し、回心物語的な奴隷物語との連続性と相違性を検証するとともに、そこにあらわれている労働倫理を分析した。

こうした作業を通して、アメリカ的な労働倫理の成立と発展のなかで宗教的倫理意識が果たした役割、およびこの歴史的過程と文学形式の発展との深い関連性が確認され、今後もこの点についてさらなる検証と考察を行っていく必要があることがわかった。

⑷　宗教的物語形式から世俗的物語形式への奴隷物語の変容を考察する上で、神意（Providence）を中心とする宗教的世界観から確率論（probability）を焦点とする世俗的世界観への転換が重要な問題であることが明らかになった。この世界観の転換に密接に関連する、確率・運・リスクといったテーマについては近年多くの研究成果が生み出されており、そうした研究成果のいくつか（Maurice E. Lee, *Uncertain Chances*（2012）, Jackson Lears, *Something for Nothing*（2003）, Jonathan Levy, *Freaks of Fortune*（2012）等）を参照した結果、それらに照らし合わせて研究をさらに発展させていく必要性が明確になった。こうした方向性からダグラスの奴隷物語を読解する学会発表を行い（学会発表①）、現在、論文として発表する準備を進めている。

## ５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

① 堀 智弘、アメリカの奴隷の「栄えある復活」－回心物語の書き換えとしての『フレデリック・ダグラスの生涯の物語』、黒人研究、査読有、Vol. 86、2017、pp. 12-24

② 堀 智弘、アメリカの奴隷も崇高を唄う－フレデリック・ダグラスにおけるロマンティシズムの美学と自由の倫理、人文社会論叢（人文科学篇）、査読無、Vol. 35、2016、pp. 21-35

〔学会発表〕（計２件）

① 堀 智弘、Providence から Probability へ－Frederick Douglass の奴隷体験記（1845, 1855）を中心に、日本アメリカ文学会東北支部、2017 年 3 月 4 日、東北大学（宮城県仙台市）

② 堀 智弘、南北戦争以前の奴隷物語の発展について－*Narrative of the Life of Frederick Douglass*（1845 年）を中心に、日本英文学会東北支部、2015 年 11 月 7 日、宮城学院女子大学（宮城県仙台市）

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
堀　智弘（HORI, Tomohiro）
弘前大学・人文社会科学部・准教授
研究者番号：１０６３４７１９

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし

(4)研究協力者
なし